

道博協ニュース

第57号

発行 平成9年(1997)2月25日
発行所 北海道博物館協会
事務局 北海道厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第一回北海道博物館協会

ミュージアム・マネージメント研修会を終えて

第一回の北海道博物館協会ミュージアム・マネージメント研修会を、平成八年十一月二十八、二十九日の両日、旭川市の大雪クリスタルホールを会場にして、全道から六十名の参加者を迎えて開催致しました。

このミュージアム・マネージメント研修会は、昨年三月にまとめられた「北海道博物館協会 基本問題検討委員会報告」の中のIV事業計画「2 研修事業の充実(九頁)、特に館長及び事務職員の博物館経営に関する学習機会の充実をはかることの必要性の指摘を受けた、平成八年度事業の一つです。

なお、この研修会は北海道教育委員会主管の平成八年度生涯学習推進事業「生涯学習振興奨励補助金の交付を得て実施したものです。

趣旨

文化そして生涯学習の中核的な施設としての博物館は今、

は、現在博物館行政や博物館経営の実務に携わっている方々のミュージアム・マネージメントに関する考え方や経験を、参加各施設の今後の経営に役立てることを目的といたしました。

内容

文化の質が問われる時代、物質的豊かさよりも精神的な豊かさを求める時代、個性化の時代、自らの欲求にもとづいて学習する時代などといった時代的な背景のもとで、今後とも人々の生活文化の創造や発展に積極的にかかわっていくことが求められています。

この変化する時代に博物館が対応するためには、心理学や教育学、マーケティング理論等々を導入した新しい経営理論の構築や事業の展開が必要となります。

したがって、この研修会で

北海道教育委員会の生涯学習推進事業 — 生涯学習振興奨励補助金の活用について

今回の第一回北海道博物館協会ミュージアム・マネージメント研修会の開催には、道教委生涯学習部社会教育課の助言を得て標記補助金の交付申請を行い、その交付の決定をいただきました。

この制度は各種団体が実施する生涯学習に係わる事業に

北網圏北見文化センター館長 久保勝範氏
事例報告二「斜里町立知床博物館の現状と課題」斜里町立知床博物館館長 中川 元氏
事例報告三「プロビデンス号室蘭来航二〇〇年祭と博物館」室蘭市民俗資料館館長 久末 進氏

研修会には講演二題と三館の研究事例報告、そしてそれらを受けての質疑応答で、演題と講師、そして事例報告の発表者等は以下のとおりです。

講演一「北海道の博物館の現状と課題」北海道教育委員会生涯学習部社会教育課長 小山忠弘氏
講演二「ミュージアムマネージメントの考え方」国立科学博物館教育部長 大堀哲氏
事例報告一「北網圏北見文化センターの現状と課題」

ついて、その事業費の二分の一を道が補助するもので、事業の実施者は道教委の本庁もしくは各教育局の社会教育課に補助金交付の申請を行います。

旭川市で開催した平成八年度第三回役員会において、道博協としても今後この制度を

なお、生涯学習振興奨励補助金交付の事務処理のために道教委へ提出するために作成する「事業報告書」を増刷し、希望する館・圏へは、事務局に連絡いただければお送りいたします。(事務局)

司会・進行 苫小牧市博物館長 佐藤一夫氏
また、講演と研究事例報告の概略は本誌二頁以降に掲載しています。

積極的に活用して行くことを申し合わせました。
したがって、今後、当協会の各地域ブロック連絡協議会及び各専門部会が開催する巡回展や研修事業等の内容充実を図るためにこの制度の積極的な活用が望まれます。(事務局)

講演一

「北海道の博物館の現状と課題」

北海道教育委員会生涯学習部

社会教育課長 小山 忠 弘 氏

社会教育行政に携わっている者の一人として、北海道の博物館についてどのように考えているのかお話しさせていただきます。

博物館は開拓の歴史や古い物が展示されている所であり興味ある人が見に行く所、一度行ったらしばらくは行かなくてもよい所という認識の人がまだ多いように思う。皆さんがこのような住民の意識をどのように変えて行くかが今



後の課題です。博物館に入っ
て感じるの、解説の文字が
小さすぎる事です。もつと
文字を大きくすること、漢
字にはルビを付け、難解な用
語には小学校の中学年が理解
できる程度の解説をするなど
の工夫が必要です。博物館側
の論理による展示だけでは多
くのの人に親しまれないと思
います。

北海道には九十を超える博
物館がありますが、相互のネッ
トワークが不十分で点として
しか存在していないのではな
いでしょうか。これからの社
会教育は各市町村の完結型で
はなく交流型社会を意識した
展開をすべきです。博物館は
生涯学習社会の総合的な学習
施設であるという認識を持ち、
まちづくり計画の中に位置付
け、住民が積極的に参加して

博物館づくりをするという、
いわゆる第三世代の博物館が
望ましいと思います。特に北
海道では自分の地域そのもの
が博物館なのだという意識を
育てる、つまりエコミュージ
アムの思想が大切なのです。
行政改革や地方分権が叫ば
れている中で、地方六団体か
ら「博物館に関する法令等に
よる措置規制は廃止すべき」
の提言に、文部省は「関係法
令の廃止は不適當」と回答し
ています。地方分権というこ
とで国の最低基準をはずすと
自治体の特色を出せる反面、
首長の判断次第で充実される
所とそうでない所の格差が生
ずる可能性があります。

今日、博物館が総合的な学
習施設として認識され、道内
で九十館を超えていることか
ら、道教委の社会教育課にも
博物館の専門的知識を持った
人の配置が必要だと考えてい
ます。平成十年度から始まる
第三次北海道教育長期総合計
画に道立の自然系の博物館の
整備を盛り込むことも検討し
たいと考えています。なぜ自
然系かと言いますと、北海道
のように豊かな自然が丸ごと
残っている所が全国に無いか
らです。個人の夢を申し上
げると、各界各層あらゆる知
恵を結集して国立の自然史博
物館を北海道に誘致できた
：ということですが。それは一
か所にとどかない建物を建て
るのではなく、共通する特色を
持つ何市町村かをくくったゾ
ーンを博物館にするという考
え方です。生涯学習のまちづ
くりが盛んな今日、「国立自
然史博物館のまち〇〇町」と
いうのは、全国・全世界への
格好のセールスポイントにな
ると思います。文化的、学術
的施設として魅力のある博物
館にすれば、世界中から人が
来るのです。

これからは市町村単独で独
立した社会教育施設を設置す
るのではなく、近隣の市町村
との連携による設置や、複合
による設置が望ましいと思い
ます。このクリスタルホール
も音楽堂・国際会議場・博物
館の機能を持つ複合施設です。
大雪アリーナも有り、体育的
な欲求も一か所で満たせるか
ら旭川市民の利用頻度も高い
のだと思います。市町村、道、
国が役割分担をし、トータル
としてどういう施設を整備す
るのか、所管による縄張り意
識を捨ててあらゆる人が気軽
に、効率的に利用できるよう
なネットワークシステムの形
成が急がれています。

これからは道博協が道教委
に対する陳情要望の団体とし
てではなく、一緒に知恵を出
し合い北海道の博物館の発展
のために力を合わせていただ
ければありがたいと思います。
北海道には個人の博物館や
特色のある博物館が少ないと
いう課題の解決を図るとも
に、様々な学習機会の拡充を
図ることが生涯学習行政
の中心課題でありますので
公民館や図書館の持つ役割・
機能を越えた活動を展開する
ために検討しなければならな
いと思います。施設がどんな
に立派であっても、住民に親
しまれ多くの人々に利用され
なければ存在価値はないのだ
と思います。

講演二

「ミュージアム・マネージメントの考え方」

国立科学博物館

教育部長 大堀 哲氏

一九九七年頃から、国民の意識は、ものの豊かさから心の豊かさを重視することへ変化していった。こうした社会の動きと運動し、心の豊かさ、地方の時代をリードするシンボルとして、博物館が全国各地につくられた。八〇年代にかけて、博物館は立派で豪華な建物や資料を人々に提供しなければ、心の豊かさを実現させられると考えていた。しかし、九〇年代にはいと、心の豊かさの意識が、より質の高いもの、より自己実現で

博物館協会ミュージアム・マネージメントに対応するミュージアム・マネージ

主催 北海道博物館協会 日本博物館協会 日本歴史学会



きるものへと変わっていった。

人々が博物館にも自己実現を求める時代になり、今までのような考え方は利用者はついてこなくなつた。博物館の全職員が、利用者を満足させるための運営の仕方、つまり、ミュージアム・マネージメントを考えることが必要になつたのである。

人々を満足させるために、あらためて博物館の理念や使命を問い直すことである。いろいろなことが見えるようになる。資料収集を市民参加でやってみる。美術館では、有名作家の作品だけでなく、市民の作品を展示する。博物館の資料を使って子供たちの教育活動をやる。量をこなすより質を重視する。自然科学、美術、歴史など、分野ごとのやり方を見直して活動していくなど、など。

我々は良い企画であれば誰

でも理解してくれるという思いこみがあつた。しかし、必ずしもそうはいかず、どうすれば人々の関心を引くことができるかを考えなくてはいいけない。博物館にとって、地域のニーズ、利用者のニーズ、

あるいは潜在的な博物館に出来ない人々のニーズなどを把握し、そこからあらたなニーズを創出しなければならぬ。そのためには、商品がつけられてから市場にでまわり、人々に消費されるまでの過程をチェックするというマーケティングの手法を博物館もとり入れることが必要になつた。

立派な展示がいくつもできているが、どういうふうに表示をマネージメントするかということも合わせて考えなくてはならない。このごろの博物館づくりはだいたいそこを考へるようになってきている。教育担当者をおき、教育機能を充実させようというのものと今の現れである。教育担当職員に限らず、市民参加のボランティア制度も同様である。ボランティアにどういうふう

を生き生きしたものにしていくための重要なファクターになるだろう。

利用者が学ぶのは展示や教育プログラムへの参加だけではない。今まで、あまり考えなかった食堂、便所、駐車場、トイレ、ミュージアムショップなどのサービスも重視していかなければいけない。一方、楽しみながら学べるような、エディケーションとエンターテイメントをあわせたエデュテイメントという考え方が、これからの博物館では重要になつてくる。

博物館を訪れた人は何に感動するの。まず展示に感動すると思うが、最終的に、博物館で人は、「モノ」ではなく「ヒト」に感動するのではないだろうか。我々職員やボランティアが利用者にもいつかどんな働きかけをしているのかということが微妙に影響して、全体の入館者につながっていくのだと思う。利用者とのコミュニケーション、接客なども重要な要素となる。今や博物館は自分の博物館だけで自己完結する時代ではない。他の博物館はもちろん、

青年の家、あるいは大学、そして農協や病院などとも連携して、ネットワークをつくり、そこでいろいろな事業を考えてみると、今までできなかったと思つていたことができて、それが利用者によるこばれらるということがあるのではないだろうか。もつと連係、協力を考えていかなければならない時代ではないのかと思う。

要するに、博物館が総合的視点から、人や金、モノ、情報などの資源を環境に適合させながら、いかに合理的、効率的に博物館の目的達成につとめるか、もつとわかりやすい表現をすれば、いかに利用者に感動を与えるかというような運営の手法が、ミュージアム・マネージメントではないか。だから我々は、地域社会や利用者のニーズをどうつかんで、どういうふうになにかという創造し実現しているかということも考へていかなければならない。博物館は誰のためにあるのか。いうまでもなく利用者のためにあるのであつて、当然、利用者の視点に立つた運営にとめなければならない。

事例報告一

「北網圏北見文化センターの現状と課題」

北網圏北見文化センター 館長 久保勝範氏

北網圏北見文化センターは、昭和五十九年にオープンしました。この施設は、自治省の補助金を受けた施設で、博物館法による博物館ではありません。

北見文化センターの大きな特徴は、博物館、美術館、科学館、この三つの機能を複合した複合施設で、計画当初、管理運営の面では省力化できる大きなメリットが期待でき



るものの、果たしてうまく利用していただけるのか、というところが大きな論点でした。

この計画は、昭和五十六・七十年頃からスタートしまして、昭和五十九年十一月、およそ二年四カ月で建物の建設、その間の約八カ月で展示関係を揃え完成を見ました。施設の対象地域は、二市町一三町村の網走圏地域ということでしたので、博物館の持つ持っている情報を広く教育委員会、博物館関係に提供するということを考えていました。

開館後の利用については、オープン当初の二年は事業などを組んでいましたので、八万人で推移しました。三年目からは減るという予想でしたが、六万五・六千人から、一番少ない時で六万人台ということまで今日までできています。組織は、館長以下九名ですが、当然三部門を網羅するには明らかに少ない。これに補完する意味で、非常勤でボ

ランテイアに近い学芸協力員という制度があります。この学芸協力員は、常勤一名、非常勤八名の計九名で、小中高の先生、退職された先生にお願いしています。

業務委託は、案内、清掃する方、機械警備、ポイラー、警備などで、最低でも二二名になります。委託の職員には必ず研修をいたします。特に、来館者に一番最初に接する総合案内の女性には、ユニホームを夏と冬に用意してもらって、明らかに案内とわかるようにしています。また、デパートの接客の考え方を取

事例報告二

「斜里町立知床博物館の現状と課題」

斜里町立知床博物館 館長 中川 元氏

り入れ、接客に対しては非常に気をつけています。

最近では、美術部門の独立館を持ちたいと考えています。市独自の美術館を一〇年後の見通しを持って道立クラスのものを作りたいと考えています。これは、北見市の実施計画というものがありませんが、その中の最終に近い年度に入っています。一〇館による網走市内博物館協議会もありますし、北見としては、今後も横の連係を強めることを更に行い、管内発信、道内発信のできる事業を組んでいきたいと考えています。

斜里町立知床博物館は、一九七八年に斜里町が開基百年を迎えた記念に建設されました。テーマとして、知床の自然環境とそこではぐくまれた文化を紹介する施設です。私ども博物館は、博物館の事業ばかりでなく、ロシアとの学

術交流、町の他部局と共同で、

文化財の保護行政、自然保護・鳥獣保護等も行うなど幅広い業務を持っています。知床というと、全国的に知られていますが、開館前、考

く、自然部分の展示には大変苦労した思い出があります。博物館がオープンした一九八〇年代から、斜里町独自、道、国、大学、民間、さらにそれら共同で、様々な動植物など自然環境の調査が知床半島でなされてきました。こうしたデータが蓄積され、それを互いに共有し、それを博物館として教育普及活動に利用してきました。

また、博物館活動を行う中で、施設面でもどうしても手狭というネックがありました。斜里町では、弘前市と竹富町と友好都市、姉妹町の提携を結んでおり、こうした交流の中でできた交流記念館が三年前に隣接して建設されました。この交流記念館は、単に記念館と言うだけではなく、収蔵施設、実習室、多目的ホールなどもあり、博物館として一体的に活用しています。さらに、野外には一般の傷病鳥の保護を行う鳥獣保護施設、オジロワシ、オオワシも飛来したり、エゾリス、シマリスもやってくるような野外観察施設もあり、町民の憩いの場となっています。

利用者の推移ですが、来館

者は、二万人前半まで減少した時期がありました。現在は二万五千人前後で推移しています。最近行った有料常設展示場者のアンケートにより、まずと、利用者の年齢別内訳は、比較的若い世代が多く、地域別には、町内から六%、道内から四七%、道外四六%となつています。また、開館当初からなるべく町民の利用を図っていきなさいと言つて、産業祭り、雪祭りの年二回の無料開放、三月三日と五月五日、今は学校の週休日、隔週の土曜日は児童生徒を無料にするなど、無料で利用できる機会を多くつづけています。普及行事の参加者を合わせ、総来館者の半数が地元町民と考えています。

普及事業の特別展示は、利用者が少ない秋から冬に行っています。講演会は特別展に合わせたものと交流事業に關

するもの。最近では、国外研究者の来館もあり、海外研究者の講演をいただく機会も多くなつています。このほか、博物館講座という事で三〇講座四四回(一九九四年度)行っています。

私どもの博物館で力を入れているものは、刊行物、広報で、カラーで知床の自然や、歴史、文化に関する小冊子を作り、町内全学校に配付しています。また、博物館協力会でさらに増刷してもらつて一般に実費でおわけしています。開館して一八年を経たこれからの課題は、これまでの調査研究をふまえた常設展示の改訂、ボランティア導入等による情報提供、野外学習施設の充実などで、利用者ニーズが多様化している中で、生涯学習機会提供の場として役割を果たしていきたいと考えています。

事例報告三

「プロビデンス号室蘭来航二〇〇年祭と博物館」

室蘭市民俗資料館 館長 久末進一氏

私共の民俗資料館は、室蘭に港ができて百年目の開港記

念として一九八〇年に開館しました。館の特徴と言いましても自慢できるような活動は特にありませんが、まさに典型的な地域密着型の博物館ではないかという気がします。小さいながら館の魅力づく

りというものにこだわつてきたつもりです。収蔵資料の「資料化」をはかり、丹念に手入れをして、資料を再認識する形の教育活動の展開を心がけています。例を挙げますと、去年の特別展では、発見されたばかりの青い目の人形をターゲットにした展示を「青い目の人形イブリン展」というテーマで開催、まれにみる人館者数を記録しました。民俗資料館の目玉商品として、一七九六年に室蘭の港にやってきた探検船プロビデンス号の六〇分の一の模型があります。私が開館のための準備中に赴任した時に、最初に目に付いたものはこの模型でした。なぜかと言いますと、探検船の何が室蘭とつながりを持つのかに、素朴な関心を持ったからです。この英国の帆走軍艦を調べていくうちに、プロビデンス号艦長プロット

ンが米国コロンビア川を最初

に探検し、バンクーバー市がプロットンを開拓の恩人と考えていることなど、プロビデンス号は、室蘭の地域史を語る資料であると同時に、世界史そのものにつながつていける歴史的価値をもつものだということがわかりました。

市立函館図書館に、一八〇四年に福居芳庵によつて描かれた「蝦夷の嶋踏」という古文書があり、プロビデンス号が描かれています。この添図も近年の研究で加藤肩吾の絵図を下絵にして描かれたものらしいことがようやく判明しました。

室蘭港の入り口に位置するところが大黒島があります。ここにはプロビデンス号の乗組員であったハンス・オルソンの墓がありました。この墓石は、大黒島灯台が建設された明治に取り壊されてしまいましたが、一九五五年に地元のロータリークラブが大黒島の記念墓碑を作りました。この大黒島も将来的には博物館のエリアの中に取り込もうという希望を抱いています。

した。推進母体は、財団室蘭ルネッサンスという組織でしたが、室蘭市と民俗資料館も後援するという形で行いました。民俗資料館としては、博物館側の学術資料の提供というところにとまりましたが、館が蓄積してきた資料研究が、このような場で有効に還元されたということは意義深いと思います。また、将来、プロビデンス号に関する記念エリアで、見学会等の博物館の教育普及事業を、いろいろな機会に催していけるのではないかと期待しています。

そういうことをあらためてしっかり我々博物館の職員は考えていかなければならない。それによつて、また違った考え方が少しずつ見えてくるということがあるのではないだろうか。

第一回北海道博物館協会
ミュージアム・マネージ
メント研修会報告取りま
とめのため、本号発行が
遅れました。お詫びいた
します。

新館・園の紹介 — 榎法華村灯台ファミリ―博物館

太平洋から寒流の親潮が、津軽海峡から対馬暖流の枝わかれした津軽暖流が交差する、榎法華村・恵山岬の沖は、「恵山魚田」といわれた、魚の豊かな漁場です。そして、ここは日本海と太平洋を結ぶ海運ルートとしても重要なポイントでした。しかし寒暖差のある激しい海流は濃霧を発生させ、活火山・恵山が落ち込んだ岬の海中には、危険な暗礁が散りばめられているという航海の難所でした。

この難所、恵山岬に、沖行く船の安全を守るよう、明治三三年「恵山岬灯台」が建てられ、海に生きる人々の心の支えとして灯りを灯し続けてきました。

榎法華村灯台ファミリ―博物館は「榎法華村の未来を明るく灯し、安全に航海できるような道標となるように」と願いを込めて、愛称を「ピカリン館」と名付けられ、長い間恵山岬灯台が灯してきた、灯台の生い立ち

や、榎法華の自然や村の人々の暮らしぶりを、ギッシリと詰め込んで、平成七年四月に開館しました。

一階展示室の入口を入ると、二階吹き抜けを貫いて、初代恵山灯台の模型が眼前に迫ってきます。

この模型は、来館者の手で灯台に灯りが点けられる仕組みになっており、灯がともると同時に、天井には、初点灯当時の満天の星空が広がります。初めて恵山岬灯台に灯りがともった当時の人々の喜びや感動を、体験



してください。

初代恵山岬灯台の模型の周りは、現在の灯台のしくみやはたらき、電波標識・音波標識などの、さまざまな灯台の仲間を、実際に使われていた灯台の機器類やパネルを使い、やさしく紹介しています。

さらに中へと進んでいくと、恵山岬を中心とした、榎法華村の再現ジオラマが展示されています。このコーナーは、海上から恵山岬を観察するという趣。ジオラマには、榎法華村の位置がスポットライトで指示され、説明ナレーションで恵山岬や榎法華村の様子を知ることができます。

また、ミニシアターが設置され、カモメの目を通してみた榎法華の自然・人々の暮らしを、一〇分程の映像で紹介しています。二階展示室は、「世界の灯台の歴史」と、「日本の灯台の歴史」の二つのコーナーに分かれています。

「世界の灯台の歴史」コーナーでは、灯台のルーツとされ、世界七不思議の一つにも数えら

れる「ファロス灯台」の大型パネルをシンボルに、世界の灯台の歴史を、記録として残っている「のろし」から、近代の灯台が成立するまでの年表や、世界のそれぞれの世紀を代表する灯台を、グラフィックパネルでわかりやすく紹介しています。

「日本の灯台の歴史」コーナーでは、西洋式の灯台を取り入れ、日本独自の灯台が発展していく過程を同じくグラフィックパネルで紹介しています。

また、いろいろな灯台・北海道の灯台・恵山岬灯台生活史の写真九五枚を、フォトCDを使うことにより、鮮明な画像で見ることができるようになっています。

その他、初代恵山岬灯台で使用されていたものと同型のレンズや、灯台で使用していた灯器類を、体験型遊具として展示しており、手を触れることにより、灯台に灯りが灯るまでのしくみを知ることができます。

また二階には、灯台情報室、研修室があり、灯台情報室では灯台・自然・旅などの図書を自由に読むことができ、研修室は

さまざまな学習や会議などに利用できます。

二階は、恵山岬灯台と同じ高さの展望室になっており、視界約二七〇度のパノラマで、榎法華の自然、恵山の四季、太平洋の光景を楽しめます。

榎法華村灯台ファミリ―博物館は、全国的にもユニークで貴重な、灯台の体験学習型博物館です。是非、灯台と、榎法華の自然を体験に来て下さい。

館長 佐々木 満雄

〈利用案内〉

★開館時間

午前九時一五分から午後五時

★休館日

毎週月曜日（祝日の時はその翌日）・年末年始（二月三

日から一月五日まで）

★入館料

一般四〇〇円（三〇〇円）

小中高二〇〇円（一五〇円）

（一）は一〇人以上の団体

★交通案内

函館駅より、国道二七八号線

を恵山方面に、車で六〇分

★問い合わせ

電話 〇二三八一八六一二一五

新館・園の紹介

ところ遺跡の館・遺跡の森

常呂町は遺跡の多い町です。現在のところ一二八個所の遺跡が発見されています。中でもオホーツク海と日本の三大湖の一つであるサロマ湖に面した地域の一部は史跡常呂遺跡として指定を受けています。堅穴住居の総数が二千五百軒以上に及ぶ日本でも代表的な集落遺跡です。

この施設は平成三年から五年に史跡常呂遺跡の整備を目的として文化庁の史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）の採択をうけて建設しました。

整備の基本目的は①「遺跡の町とこころ」の顔として町民、見学者が遺跡との触れ合いの中で、古代の生活・文化を学び憩える場とすること。②体験的な学習を進める中で、現代を見つめなおす場とすること。③自然環境を活かした整備を行い、自然と人間との関わり合いを学ぶ場とすること

の三点が挙げられます。特にこの地域はカシワ、ナラが主体の広葉樹林であるため樹々の保存を最優先に考えています。

ところ遺跡の館はサロマ湖畔にほど近い台地の下面に建設しました。常呂町栄浦の道々サロマ湖公園線から台地側を目を向けると樹木の間からドーム状のコンクリート造りの建物が覗かれます。この建物は縄文文化の円形住居を模したもので内部は事務室、展示室、収蔵展示室、映像ルームからなっています。延べ面積三七五㎡の小型館です。

展示室には町内から出土した各時代の遺物が年代ごとに展示されています。中には考古学上貴重な遺物が多くあります。一例をあげますと約二万年前の旧石器文化の石器は北海道でも数少ない最古のもので、縄文文化前期末の押型文土器、晩期のヒスイ製の

玉のほか、お墓から出土した十一点に及ぶ各種形態の土器の中には人面を模したものがああります。続縄文文化ではお墓から出土した多量の琥珀製のネックレス、青紫色のガラス玉など興味深い装飾品もああります。擦文文化では須恵器の大甕。アイヌ文様と類似した彫刻が施された帯び織具は学術的に貴重な資料です。謎の海洋民族であるオホーツク文化では豊富な土器の他に熊、ラッコ、オットセイなどの彫刻品が興味をひきます。さら

に鉄製品、青銅製品、銀製の耳飾り、盆、椀などの炭化木製品も一見の価値があります。堅穴住居の内部をイメージした収容人員五十名の映像ルームには一〇〇インチの液晶プロジェクターと二九インチの電動昇降テレビ三台が設置してあり遺跡解説のビデオを觀賞することができます。

遺跡の森は遺跡の館の裏台地にあります。面積は一二万㎡に及び約一五八軒の住居跡が発見されています。ここの住居跡は擦文文化が台地の西



端部、続縄文文化が北端部、縄文文化が東端部周辺にあります。時代によって分布の異なる点が大きな特色です。復原整備はこの様な事実を踏まえた上で行いました。完成した復原住居は擦文文化四棟、続縄文文化一棟、縄文文化一棟の他に屋根の無い露出展示住居も各一棟ずつ建設し

ました。それぞれの復原住居（村）は園路で結ばれ、それぞれの文化により住居の形態・規模・構造の違いを学習することが出来ます。

この地域は春から初夏にかけて野鳥が騒がしいばかりに鳴きながら飛びかいバードウォッチングには最適の場所です。夏はサロマ湖の夕日、冬はスノーモビル、パラセイリングなどアウトドアのスポーツも楽しめます。

学芸員 武田 修

（利用案内）

★開館時間

午前九時～午後五時

★休館日

月曜日、祝日の翌日、年末年始（七、八月無休）

★観覧料

大人二〇〇円（二五〇円）

中学生一〇〇円（八〇円）

小学生 五〇円（三〇円）

★公共交通

JR網走駅下車バスで約七〇分 サロマ湖栄浦下車徒歩二分

★問い合わせ

電話 〇一五二一五四一三九九三

館・園のおもな事業

館園行事 一月～三月

- 厚岸町郷土資料館
「町民寄贈資料展」3月下旬
- 岩見沢郷土資料館
「モーターづくり」2月
- 帯広百年記念館
第15回郷土美術展2・1 / 23、自然観察「冬の生き物ウォッチング」2・11、博物館講座「生き物と暮らす町づくり」2・15、同「大昔の十勝」3・15
- 黒松内町ブナセンター
企画展「冬の民具」2月 / 3月
- 標津サーモン科学館
「シロサケ飼育実習」2月
- 般法華村灯台ファミリー博物館
企画展「日本の灯台写真展」11・1 / 3・31
- 苫小牧市博物館
博物館大学講座「北の建物散歩」、同「北海道の開拓」、博物館クラブ「はにわを作ろう」2・8、同「模様を描こう」2・22、映画会3・29

- 名寄市北国博物館
「北国講演会」3月
- 道立文学館
所蔵品展「船山馨の文学世界」1・14 / 3・16
- 道立文書館
「文書等保存利用期間・団体等職員研修会」2月

- 移動天文台「ヘール・ポツプ彗星観望会」3・28 / 30
- 苫小牧市科学センター
第5回天文教室3・8、プラネタリウム投影「冬」12・1 / 2・22、同「春」2・23 / 5月中旬、第4回「星と音楽の調べ」2・15、親子日曜教室「ムックリを作ろう」2・2、16、同「乾電池チェッカーを作ろう」3・16、30

- 道立帯広美術館
2月中旬、3月上旬
「道立帯広美術館」
「フザンソン美術館展」
「フランス美術二〇〇年の巨匠たち」2・22 / 3・30、ミュージアム・コンサート3月中旬、美術講演会3月中旬

- 道立三好太郎美術館
所蔵品展「三好太郎の世界」
「ロマンと抒情の画家」
11・30 / 3・30、ミニ、リサイタル3・29
- 道立近代美術館
常設展「イメージの創造」
及び「日本のガラス」2・1 / 4・13、特別展「小野竹喬」展2・1 / 3・16、美術講演会「技法入門・日本画」2月
- 道立旭川美術館
特別展「北海道・今日の美術」1・19 / 2・16、特別展「北海道の抽象絵画―未知の形象を求めて―」2・22 / 3・30、「特別講座」

事務局日誌

(平成8年10月1日～平成9年2月5日)

- 道立帯広美術館
36回名寄大会の補助金を道教育委員会へ交付申請。
- 道立社会教育総合センター
主催平成8年度博物館等経営専門研修講座に係わる名義後援。
- 北海道博物館協会
第10・9 当協会道南ブロック博物館等連絡協議会への交付金送付。
- 平成8年度第3回役員会、第1回当協会ミュージアム・マネージメント研修会の案内状、及び講師等協力の依頼状の送付。
- 道教委へ第1回ミュージアム・マネージメント研修会に係わる平成8年度生涯学習事業・生涯学習振興奨励補助金の交付申請。
- 道教委から第1回ミュージアム・マネージメント研修会に係わる平成8年度生涯学習事業・生涯学習振興奨励補助金の交付決定。
- 各館園へ「北海道博物館協会加盟館園等の現況」の調査票送付。
- 平成8年度第3回役員会、及び第1回ミュージアム・マネージメント研修会の開催。
- 講師、及び関係機関等へ第1回ミュージアム・マネージメント研修会に係わる礼状送付。
- 加盟館園及び美術館、青少年科学館、動物園水族館等の連絡協議会へ新版「北海道博物館ガイドブック」の編集に係わる協力依頼状の送付。
- アイヌ民族博物館へ火災見舞状の送付。
- 「北海道博物館ガイドブック」の編集委員への委嘱状の送付。
- 道教委へ第35回北海道博物館協会厚岸大会の事業終了届の提出。